

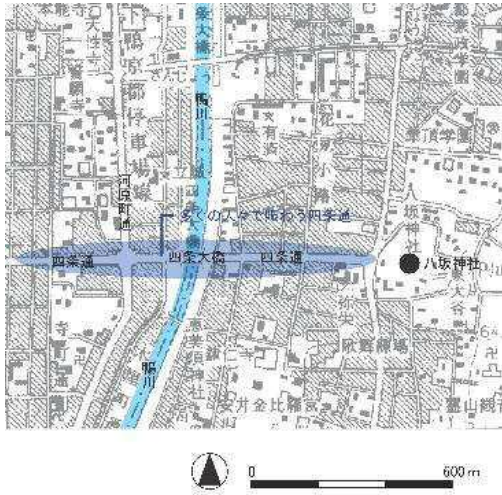


図2-25 おけらまいり

はないが、しゅうみやこめいしよ ず え「拾遺 都 名所図会」の中に、ぎおんけずり祇園削かいけのしんじ掛 神事として詳細が記載されている。

おけらはキク科の多年生草本で、その根茎を乾燥させ外皮を取り除いたものは白朮おけらといい、しょうやく生 薬として健胃薬や屠蘇とそに使用される。

おけらは、焼くと強い匂いを発することから、魔除けとして、年頭の招福除災の行事に使用され、そのおけらをまぜて灯籠で火をたくので、「おけら火」という。

古式にのっとって火きり臼と火きり杵できりだされた御神火は、大晦日の午後 7 時、除夜祭齋行ののち、宮司以下祭員によって、境内に吊された灯籠に灯され、人々の願いを記したおけら木と共に、夜を徹して焚かれる。

人々は、その「おけら火」を吉兆縄という竹の繊維で編んだ縄の先につけて、種火が消えないようにくると回しながら家まで持って帰り、神棚の灯明に灯したり、「おくどさん」(かまど)の種火にする。お正月に、この種火を使って炊いたお雑煮を食べると、1 年間無病息災で暮らせると言われている。



写真2-32 おけらまいり

また、燃え残った火縄は「火伏せのお守り」として、台所にお祀りする。

大晦日の夜、八坂神社に向かう四条通りは、おけらまいりに行く沢山の人々で賑わう。境内の「おけら火」のかがり火の情緒や、吉兆縄をくるくるまわす人々の光景は、年越しの京都に欠かせない。

イ 京都の祭礼に見る歴史的風致

京都では、一年を通して各地で様々な祭礼が営まれ、これらが年中行事となって古都の四季を織りなしている。たとえば、これまでに示した祭礼などにより次のような一年を見ることもできよう。

初春は初詣に始まる。ご近所の氏神にはじまり、有名神社、なかには都七福神めぐりのバスツアーもある。十日前後になると十日ゑびすが賑わい「商売繁盛、笹もってこい」の掛け声が響く。2月の節分祭も各地で開催される。有名な吉田神社では、数多くの露店が並び活気にあふれる。4月の陽春の花のもとでの今宮神社のやすらい祭、壬生の大念仏が終わると、5月の葵祭である。

盛夏をむかえては祇園祭が、7月いっぱい市民を興奮のなかにおく。クライマックスは7月17日の山鉾巡行である。8月の京都五山送り火の頃には、夏の盛りに秋の気配を感じる。10月には平安神宮の時代祭、同じ日に鞍馬の火祭も行われる。11月が嵐山のもみじ祭とともに過ぎ去り、除夜の鐘とおけらまいりとともに年が暮れ、再び新しい年を迎える。

このように、先に例示した祭を中心にみても、京都の四季が祭礼とともにあるのが分かる。

京都で行われる祭礼は、それぞれを個別に見ても町と良好な関係を築いていることが分かる。祭礼の中で、お囃子などを奏で、歌い、時には舞いながら、町の中を練り歩くものも多く、活気に満ち溢れる雰囲気のもの、平安の雅を感じさせるもの、壮大なスケールのもなど、それぞれの祭礼によって様々な雰囲気を町にもたらす。また、そこで使われる装飾や衣装は、京都の伝統産業のレベルの高さを思わせる。これらの儀礼や装飾品は、先人のたゆまない努力を感じさせ、伝統を次世代に継承していかなければならないことを感じさせる。

また、祭礼が行われる寺社の境内や参道には、露